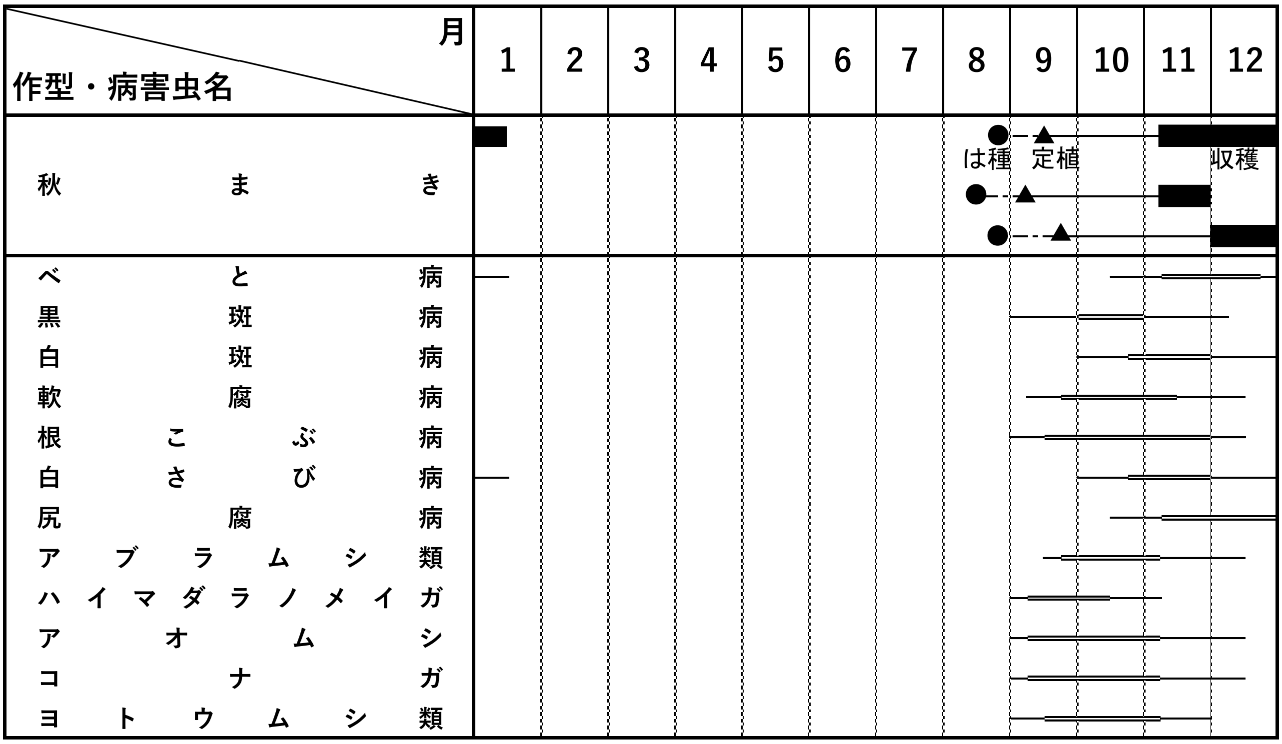
はくさい

農薬取締法上、「はくさい」と「非結球はくさい」は別の作物である。
はくさいには、「はくさい」「結球あぶらな科葉菜類」「葉菜類」「野菜類」に適用のある農薬を使用すること。

発病・加害時期
発病・加害最盛期



べと病

留意事項

1 晩秋と春の低温、多雨時に発生が多い。
2 アミスター20フロアブルは、薬害のおそれがあるため、浸透性を高める展着剤を加用しない。高温条件下では、結球前に散布すると薬害が生じるので使用しない。
3 QoI剤（１１）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
4 ダコニール1000、プロポーズ顆粒水和剤の成分TPNの総使用回数は3回以内（但し、は種または定植前の土壌混和は1回以内、散布は2回以内）。

防除方法

1 排水を良好にする。
2 密植を避ける。
3 肥効切れ、窒素質肥料の過用を避ける。
4 被害株は、ほ場外へ持ち出し処分する。

注１: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ダコニール1000 Ｍ５【1000倍　7日／2回】
・オーソサイド水和剤80 Ｍ４【600倍　7日／5回】
・ピシロックフロアブル Ｕ１７【1000倍　前日／3回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アミスター20フロアブル １１【2000倍　7日／4回】
・プロポーズ顆粒水和剤 Ｍ５ ４０【1000倍　7日／2回】
・ランマンフロアブル ２１【2000倍　3日／4回】

黒斑病・白斑病

留意事項

1 予防的防除に重点をおく。
2 晩秋から初冬にかけて雨の多い年に発生が多い。
3 SDHI剤（７）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
4 ダコニール1000、プロポーズ顆粒水和剤の成分TPNの総使用回数は3回以内（但し、は種または定植前の土壌混和は1回以内、散布は2回以内）。

防除方法

1 肥効切れしないように、肥培管理に注意する。
2 被害葉は、早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 排水を良好にする。
4 なるべく連作を避ける。
5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ダコニール1000 Ｍ５【1000倍　7日／2回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ロブラール水和剤 ２【1000～1500倍　14日／3回】
・プロポーズ顆粒水和剤 Ｍ５ ４０【1000倍　7日／2回】
・パレード20フロアブル ７【2000～4000倍　前日／3回】

軟腐病

留意事項

1 薬剤は株の地際部にも十分散布する。
2 害虫の加害傷口から病原菌が侵入することが多い。
3 秋期温暖の年に発生が多い。
4 土壌pHが中性（pH6～7）で発生しやすい。
5 アグリマイシン-100は、薬害のおそれがあるため、高温期または幼苗期に使用しない。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

6 だいこん、かぶ、にんじん、ねぎ、トマト、ばれいしょなども侵す。

防除方法

1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
2 過度の早植えは避ける。
3 排水を良好にする。
4 キスジノミハムシ、ハイマダラノメイガ、ヨトウムシ、アオムシなどの防除を徹底する。
5 被害株は、早めにほ場外へ持ち出し処分する。
6 は種または定植時に、下記の薬剤を施用する。
・オリゼメート粒剤 Ｐ２【6～9kg／10a　全面土壌混和　は種時または定植時／1回】
7 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・キノンドー水和剤40 Ｍ１【800倍　30日／5回】
・マスタピース水和剤 ー(生)【1000～2000倍　前日／ー】
8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アグリマイシン-100 ４１ ２５【1500～3000倍　14日／3回】
・バリダシン液剤5 Ｕ１８【500倍　3日／3回】
・スターナ水和剤 ３１【1000倍　7日／3回】

根こぶ病

留意事項

1 薬剤は土壌とよく混和する。
2 酸性で排水不良のほ場に発生が多い。
3 ランマンフロアブルの成分シアゾファミドの総使用回数は、6回以内（但し、育苗期のかん注は1回以内、本ぽでの株元かん注は1回以内、散布は4回以内)。

防除方法

1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
2 石灰質肥料を施用して、土壌酸度をpH6.5～7.2に矯正する。
3 排水を良くし、過湿を避ける。
4 有機質資材を施用し、土づくりに努める。
5 秋まきの場合は、早まきを避ける。
6 は種または定植前に、下記の薬剤を施用する。
・ネビリュウ ３６
【20～30kg／10a　全面土壌混和　は種または定植前／1回】または
【20kg／10a　作条土壌混和　定植前／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・フロンサイド粉剤 ２９
【30～40kg／10a　全面土壌混和　は種または定植前／1回】または
【15～20kg／10a　作条土壌混和　は種または定植前／1回】
・ランマンフロアブル ２１
【500倍　2L／セル成型育苗トレイ1箱、またはペーパーポット1冊（30×60cm、使用土壌約2.5～7L）　かん注　定植前日～当日／1回】
【2000倍　株元かん注　14日／1回】

白さび病

留意事項
1 アミスター20フロアブルは、薬害のおそれがあるため、浸透性を高める展着剤を加用しない。高温条件下では、結球前に散布すると薬害が生じるので使用しない。
2 QoI剤（１１）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
3 ダコニール1000、プロポーズ顆粒水和剤の成分TPNの総使用回数は3回以内（但し、は種または定植前の土壌混和は1回以内、散布は2回以内）。

防除方法
1 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ダコニール1000 Ｍ５【1000倍　7日／2回】
・ピシロックフロアブル Ｕ１７【1000倍　前日／3回】
2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アミスター20フロアブル １１【2000倍　7日／4回】
・ライメイフロアブル ２１【2000～4000倍　7日／4回】
・プロポーズ顆粒水和剤 ４０ Ｍ５【1000倍　7日／2回】
・メジャーフロアブル １１【2000倍　3日／3回】

尻腐病

留意事項
1 11月以降、収穫まぎわに発生が多い。
2 SDHI剤（７）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法
1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
2 石灰質肥料を施用して、土壌酸度を矯正する。
3 未熟な有機質資材の投入は控える。
4 収穫後、被害葉はほ場外へ持ち出し処分する。
5 発病の恐れのあるほ場では、所定量を均一に散布して土壌と混和する。
（ⅩⅢ土壌消毒2（4）　参照）

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 －
【20～30kg／10a　は種または定植21日前／1回】

6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アフェットフロアブル ７ 【2000倍　前日／3回】
・ネクスターフロアブル ７ 【1000倍　7日／3回】
・リゾレックス水和剤 １４ 【1000倍　14日／3回】

ウイルスによる症状

防除方法

1 発病株は速やかに除去する。
2 アブラムシ類の防除に努める。（アブラムシ類の項参照）

アブラムシ類

留意事項

1 苗床は寒冷しゃで被覆して、アブラムシ類の飛来を防ぐ。

防除方法

1 下記の薬剤を、育苗期に処理する。

・ベリマークSC ２８
【400倍　0.5L／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】

2 下記の薬剤を施用する。

・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ４Ａ 【2g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】

3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アディオン乳剤 ３Ａ 【2000倍　7日／5回】
・コルト顆粒水和剤 ９Ｂ 【4000倍　3日／3回】
・トランスフォームフロアブル ４Ｃ 【2000倍　3日／3回】

ハイマダラノメイガ

留意事項

1 だいこん等あぶらな科作物を加害する。
2 7～10月が高温少雨の年に多発する傾向がある。
3 食入前の防除に努める。

防除方法

1 育苗中の苗は寒冷しゃ等で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。
2 定植には健全苗を使用し、本ぽへの幼虫の持ち込みを防ぐ。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

3 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。

・ベリマークSC ２８
【400倍　0.5L／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60㎝、使用土壌約1.5～4L）　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】

4 発生を認めたら薬液が芯葉までかかるよう丁寧に散布する。

・グレーシア乳剤 ３０【2000～3000倍　7日／2回】
・ディアナSC ５【2500～5000倍　前日／2回】
・アクセルフロアブル ２２Ｂ【1000倍　前日／3回】
・ハチハチ乳剤 劇 ２１Ａ【1000～2000倍　14日／2回】

アオムシ

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・グレーシア乳剤 ３０【2000～3000倍　7日／2回】
・ベネビアOD ２８【2000～4000倍　前日／3回】
・アファーム乳剤 ６【1000～2000倍　7日／3回】
・モスピラン顆粒水溶剤 劇 ４Ａ【1000～2000倍　14日／3回】
・ＢＴ剤 １１Ａ（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

コナガ

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

2 幼虫による被害が著しいのは春と秋である。

3 あぶらな科野菜を加害するほかナズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウなどのあぶらな科雑草にも寄生する。

4 セル成型苗では、定植前に粒剤を株元散布すると省力的に防除できる。

5 コテツフロアブルは、薬害のおそれがあるため、8葉期以降に使用する。

防除方法

1 定植時に下記の薬剤を施用する。

・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ４Ａ【2～3g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】

2 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。

・ベリマークSC ２８
【400倍　0.5L／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60㎝、使用土壌約1.5～4L）　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・グレーシア乳剤 ３０【2000～3000倍　7日／2回】
・アファーム乳剤 ６【1000～2000倍　7日／3回】
・ディアナSC ５【2500～5000倍　前日／2回】
・アクセルフロアブル ２２Ｂ【1000倍　前日／3回】
・コテツフロアブル 劇 １３【2000倍　前日／2回】
・ＢＴ剤 １１Ａ（Ⅸ野菜類の病害虫　3野菜類　参照）

ヨトウムシ類

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・グレーシア乳剤 ３０
【ハスモンヨトウ・ヨトウムシ・シロイチモジヨトウ　2000～3000倍　7日／2回】
・ベネビアOD ２８
【ハスモンヨトウ・ヨトウムシ・シロイチモジヨトウ　2000～4000倍　前日／3回】
・アファーム乳剤 ６【ヨトウムシ　1000～2000倍　7日／3回】
・ディアナSC ５【ハスモンヨトウ・ヨトウムシ　2500～5000倍　前日／2回】
・アクセルフロアブル ２２Ｂ
【ハスモンヨトウ・ヨトウムシ　1000～2000倍　前日／3回】
・ＢＴ剤 １１Ａ（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。